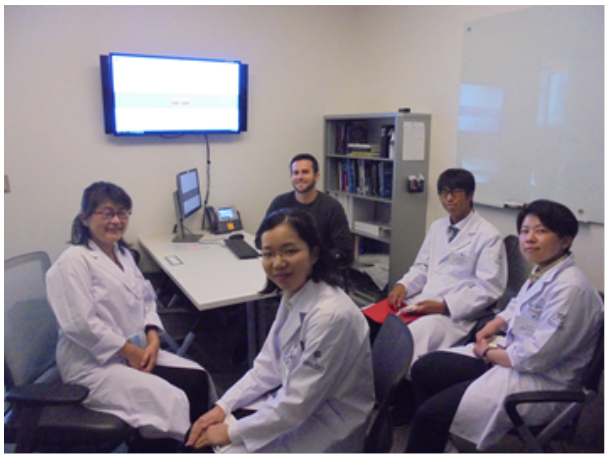
報告書

氏　名	千葉菜々絵
研修名	平成31年度 6年次 Advanced BSL におけるアメリカでの放射線治療学実習
主催団体名	福島県立医科大学放射線腫瘍学講座
研修国	アメリカ合衆国
研修期間	6月 10日 ～ 6月 24日（14日間）
研修目的	最大規模かつ最先端の放射線治療を行うアメリカのオハイオ州立大学ジェームズ総合がんセンターにて放射線治療学を学ぶため。
研修内容	6月10日　成田前泊 6月11日　11:00　成田空港発　10:40　ワシントン・ダレス空港着（乗換） 14:17　コロンバス到着 6月12日　オハイオ州立大学にて実習 6月19日　10:30　コロンバス出発　11:39　ワシントン・ダレス空港着 6月20日　アメリカ国立衛生研究所見学 6月21日　自由行動 6月23日　12:45　ワシントン・ダレス空港発 6月24日　15:25　成田空港着
研修成果	ジェームズ総合がんセンターは、放射線治療に関してアメリカでも最大規模の施設です。今回見学をして改めて、施設の大きさ、施設内の最新機器の豊富さ、働く職種・人材の多さを実感しました。ただ、それら以外の面では日本で行われていることとの間にあまり大きな隔たりはないように感じました。ですから、日本は放射線治療の分野でまだ発展の余地があると言われていますが、放射線治療を一手に引き受ける大規模施設や併設する研究施設を作り、働く職種・人材が十分に確保できたならば、つまりシステムが適切に整えば、日本でもかなり成長の見込みのある領域であると感じました。 また、AI に取って替わられる分野として筆頭に挙げられ一部の医療関係者から心配されている放射線治療学ですが、ジェームズ総合がんセンターの医学物理士の方によれば、診断治療にかかる時間や現在医師が行なっている診療以外の必要業務の効率化により、医師がさらに患者に時間を割けるようになり、患者それぞれにあった治療へ特化していくことができるようになるはず、とのことでした。医師の職業に関して言えば、需要は変わらず仕事の内容が変わる、ということでした。 以上 2 つの点から、放射線治療学の日本の未来像として私はこのように考えました。まず放射線治療学に従事する医師や関連職種の人数が増加し、必要に迫られて新たな職種がアメリカの既存の職種などを参考に誕生します。長寿国日本のがん診療は大きな課題となり、その解決

	策の一つに放射線治療学が注目を浴びることになるにちがいありません。日本のがん患者増加と放射線治療学の需要の高まりに合わせ大規模施設の建造につながり、臨床につながる研究施設がつくられ、臨床と研究の双方が互いに発展していくというわけです。 今回の留学の主要目的はオハイオ州立大学のジェームズ総合がんセンターでしたが、付随的にアメリカ国立衛生研究所を見学させて頂くことができました。そこでは、福島県立医科大学の消化器外科から研究留学されている多田武志先生にお世話になりました。まず、多田先生の研究内容である腫瘍マーカーの新規発見について説明を受けました。また、施設の案内、日本との違いについて教えていただき、アメリカ国立衛生研究所で働く別の日本人研究者の方を交えて、働き方（研究者の雇用形態と待遇）について、アメリカ国立衛生研究所の日本人研究者が多く借りているアパートメントやアメリカでの生活方法などを教えていただきました。未来の可能性を秘めた研究職の魅力を感じ、自分のキャリアの考慮においてまた新たな視点を持つことができました。
今後の取組	今回の留学以前に感じていたよりも強く、放射線治療のメリット・デメリットを患者に説明することができる医師でありたいと思うようになりました。留学以前は、放射線腫瘍学講座にお世話になっていたこともあり、放射線治療といえば腫瘍・癌だという意識が強かったのですが、ジェームズ総合がんセンターにて他の疾患に使われていることを知りました。患者や医療従事者に多くの有益な情報を提供できるよう、これからも勉強していきたいと思います。 放射線治療の分野に限らず、研究の魅力に気づくことができた研修でした。一人一人を相手に命を救う医師はなくてはならない存在ですが、研究でもたらせる効果は計り知れないものです。研究は医学部以外の学部出身でもできることから、医師であることを有利に働かせるような研究分野に進みたいと思うようになりました。研究職の可能性について探っていきたいと思います。

（放射線治療における線量測定についてのレクチャー）



（オハイオ州立大学ジェームズ総合がんセンター）